

## 格付与および動詞句に関する幼児の統語知識\*

一名詞句・格助詞の脱落・挿入現象をてがかりとして—

伊 藤 友 彦

障害児教育\*\*

(1995年10月30日受理)

### 1. 目 的

本研究は、聴覚障害を持つ子供にあらわれる格助詞の誤用などの統語的問題の性質を解明するための基礎的研究の一つであり、普通児における、格付与および動詞句に関する言語知識の特徴を言語理論との関係で明らかにしようと試みたものである。

日本語の格付与については従来からさまざまな仮説が提案されてきた。Saito (1983) は、対格は動詞によって付与されるが、主格は他のいかなる要素によっても付与されないという仮説を提案し、さらに、動詞による対格の付与には隣接条件 (adjacency condition) が関与していると述べている。この仮説から、主格は他の要素によって付与されないで格助詞「が」の省略はおこらないが、対格は他動詞によって付与されるので格助詞「を」は省略されると予測される。さらに、対格を付与される名詞と動詞が隣接している場合としていない場合では格助詞「を」が省略される割合が異なると予測される。もし、幼児が格付与に関わるこのような言語知識を持っているとすれば、この予測と一致した結果が得られるはずである。

一方、日本語の句構造については、動詞と目的語とのまとまりである動詞句 VP が存在するという立場と、しないとする立場とがある。VP があるとする立場では、日本語にも英語と同様に、主語と目的語との間に構造上の非対称性があると考えられる。これに対して、日本語には VP が存在しないとする立場では、主語と目的語は構造的に等しく動詞と関わって

いると考える。柴谷 (1989) によれば、Hale (1980, 1983) は VP を有する言語を階層言語、有さない言語を非階層言語と呼び、Farmer (1984) は日本語は非階層言語であるとした。柴谷 (1989) は、国語学では、その大勢が主語も目的語も動詞の補語とする見方に傾いているようだと述べている。これに対して、Saito (1985) は日本語には VP が存在するという立場であり、最近の生成文法理論の研究者の多くはその見方に従っているようである。もし、日本語に VP があり、日本語が階層言語であるとすれば、目的語と動詞の結び付きの方が、主語と動詞との結び付きよりも強いと考えられる。よって、他動詞文において名詞句脱落が生ずるとき、主語名詞句の脱落の方が目的語名詞句の脱落よりも多く観察されると予測される。

本研究の目的は、幼児の格付与および動詞句に関する統語知識の特徴を Saito の仮説との関連で明らかにすることである。具体的には、1) 格助詞脱落・挿入反応において格助詞「が」と「を」の間に差が認められるか、2) 名詞句の脱落・挿入反応において主語と目的語との間に差が認められるか、の2点について検討する。

### 2. 方 法

#### 1) 対象児

対象児は、4～5歳(4歳7カ月～5歳7カ月)の保育園児29名(男子15名、女子14名)であった。

#### 2) 課題および手続き

実験は個別に行った。上と下に線画が描かれてい

\* Syntactic knowledge on case-assignment and VP-node in Japanese Young Children - Evidence from Noun Phrase and Case marker drop/insertion - : Tomohiko ITO (Department of Education for Handicapped Children)(Received October 30, 1995)

\*\* 東京学芸大学 (184 小金井市貫井北町 4-1-1)

る一枚のカードを提示し、上の線画の内容を実験者が口頭で表現し（モデル文）、下の絵の内容を対象児に発話させた。下の絵の内容は、動詞がモデル文と同じで名詞のみがモデル文と異なるものであった。モデル文は、以下の5種類であり、それぞれ3文、計15文であった。a)「名詞が+名詞を+動詞」文（例：お母さんがスイカを食べています）b)「名詞が+動詞」文（例：お母さんが食べています）c)「名詞を+名詞が+動詞」文（例：スイカをお母さんが食べています）d)「名詞を+動詞」文（例：スイカを食べています）e)「名詞+名詞+動詞」文（例：お母さん スイカ 食べています）

### 3. 結 果

表1は、「名詞が+名詞を+動詞」文（例：お母さんがスイカを食べています）に対する対象児の格助詞脱落反応を示したものである。この表で注目すべきは、いずれか一方の格助詞が脱落した場合である。「が」のみの脱落（例：お母さん スイカを食べています）が1文（1.5%）しか観察されなかったのに対し、「を」のみの脱落（例：お母さんがスイカ 食べています）は35文（53.8%）観察された。つまり、いずれか一方の格助詞が脱落した36文のうち35文（97.2%）が「を」のみの脱落であり、両者の差は有意であった（ $\chi^2(1)=32.11$ ,  $p<.01$ ）。一方、「が」と「を」が共に脱落する反応（例：お母さん スイカ 食べています）も8文（12.3%）観察された。

表2は、「名詞+名詞+動詞」文（例：お母さん スイカ 食べています）に対する対象児の格助詞挿入反応を示したものである。この表から、「が」のみの挿入（例：お母さんがスイカ 食べています）が11文（15.5%）であるのに対し、「を」のみの挿入（例：お母さん スイカを食べています）がわずか3文（4.2%）であることがわかる。つまり、いずれか一方の格助詞が挿入された反応の総数14のうち11、すなわち78.6%が「が」のみの挿入であり、両者の差は有意であった（ $\chi^2(1)=73.14$ ,  $p<.01$ ）。また、表2で注目すべきは、「名詞+名詞+動詞」文に対する反応として、「挿入なし」反応が著しく多く、反応全体の71.8%を占めていることである。

表3は、「名詞を+名詞が+動詞」文（例：スイカをお母さんが食べています）に対する対象児の格助詞脱落反応を示したものである。この表から、「脱落なし」反応、すなわちモデル文と同じ文形式の反応が多く、格助詞脱落反応は少ないことがわかる。よって、「が」のみの脱落と「を」のみの脱落との間の差も明白ではない。一方、表3の「を」のみの脱落

（16.0%）を表1のそれ（53.8%）と比較すると、著しく低く、両者の差は有意であった（ $\chi^2(1)=10.53$ ,  $p<.01$ ）。

表4は、「名詞が+動詞」文（例：お母さんが食べています）に対する対象児の名詞句挿入反応の結果である。この表から、「挿入なし」反応、すなわち、モデル文と同じ「名詞が+動詞」という形式の反応に比して、「目的語名詞句の挿入」、すなわち、モデル文に目的語名詞句（例：「名詞+を」）を付け加える反応が著しく多く、両者の差は有意であった（ $\chi^2(1)=15.51$ ,  $p<.01$ ）。

表5は、表4とは対照的に、「名詞を+動詞」文（例：スイカを食べています）に対する名詞句挿入反応の結果を示したものである。この表から、表4の場合とは対照的に、「主語名詞句の挿入」反応が「挿入なし」反応よりも有意に少なかった（ $\chi^2(1)=19.06$ ,  $p<.01$ ）。

表1 「名詞が+名詞を+動詞」文における格助詞脱落

| モデル文に対する反応 | 文数 (%)      |
|------------|-------------|
| 脱落なし       | 21 (32.3 %) |
| 「が」のみの脱落   | 1 (1.5 %)   |
| 「を」のみの脱落   | 35 (53.8 %) |
| 「が」と「を」の脱落 | 8 (12.3 %)  |

表2 「名詞+名詞+動詞」文における格助詞挿入

| モデル文に対する反応 | 文数 (%)      |
|------------|-------------|
| 挿入なし       | 51 (71.8 %) |
| 「が」のみの挿入   | 11 (15.5 %) |
| 「を」のみの挿入   | 3 (4.2 %)   |
| 「が」と「を」の挿入 | 6 (8.5 %)   |

表3 「名詞を+名詞が+動詞」文における格助詞脱落

| モデル文に対する反応 | 文数 (%)      |
|------------|-------------|
| 脱落なし       | 17 (68.0 %) |
| 「が」のみの脱落   | 3 (12.0 %)  |
| 「を」のみの脱落   | 4 (16.0 %)  |
| 「が」と「を」の脱落 | 1 (4.0 %)   |

表4 「名詞が+動詞」文における名詞句挿入

| モデル文に対する反応 | 文数 (%)      |
|------------|-------------|
| 挿入なし       | 22 (27.8 %) |
| 目的語名詞句の挿入  | 57 (72.2 %) |

表5 「名詞を+動詞」文における名詞句挿入

| モデル文に対する反応 | 文数 (%)      |
|------------|-------------|
| 挿入なし       | 70 (72.2 %) |
| 主語名詞句の挿入   | 27 (27.8 %) |

#### 4. 考 察

既に「1. 目的」で述べたように、Saito (1983) は、対格は動詞によって付与されるが、主格は他のいかなる要素によっても付与されない、という仮説を提案している。この仮説から、主格は他の要素によって付与されないので格助詞「が」の省略はおこらないが、対格は他動詞によって付与されるので格助詞「を」は省略されると予測される。もし、Saito の仮説を幼児が格付与の知識として持っていれば、「が」と「を」のいずれか一方の格助詞が脱落する場合、「を」の脱落 (例：お母さんがスイカ 食べています) が、「が」の脱落 (例：お母さん スイカを食べています) よりも多いはずである。本研究の結果 (表1) では、Saito の仮説の予測どおり、いずれか一方の格助詞が脱落した反応総数36文のうち35文 (97.2%) が「を」のみの脱落であった。

また、もし、Saito の仮説を幼児が言語知識として持っていれば、「名詞+名詞+動詞」モデル文に対する反応として、「が」と「を」のいずれか一方の格助詞が挿入された場合、「が」のみの挿入 (例：お母さんがスイカ食べています)の方が「を」のみの挿入 (例：お母さん スイカを食べています) よりも多いはずである。本研究の結果、Saito の予測どおり、「が」のみの挿入が11文 (15.5 %) であるのに対し、「を」のみの挿入がわずか3文 (4.2 %) であった。

よって、本研究の格助詞の脱落・挿入反応の結果は、Saito の仮説が予測する結果と一致しており、この結果は、幼児は既に4～5歳においてSaito の仮説を格付与の知識として持っている可能性を示唆して

いる。つまり、本研究の結果は、主格と対格の格付与における非対称性、すなわち、対格のみが格付与子によって付与されるという言語知識を子供は既に4歳で獲得している可能性を示唆しているとともに、日本語の格付与に関わる言語知識としてSaito の仮説が心理的に実在している可能性を示している。

また、もし、Saito の、動詞による対格の付与には隣接条件が働くとする仮説、すなわち、動詞による対格の付与は対格を付与される名詞句が動詞と隣接している場合に行われ、隣接していない場合は行われないという言語知識を幼児が持っているとしよう。もしそうだとすれば、両者が隣接していない文、すなわち「名詞を+名詞が+動詞」文における「を」の脱落率は、隣接している文、すなわち「名詞が+名詞を+動詞」文における「を」の脱落率よりも低くなると予測される。本研究の結果、「名詞を+名詞が+動詞」文に対する「を」のみの脱落は4文 (16.0 %) であり、「名詞が+名詞を+動詞」文における「を」の脱落35文 (53.8 %) よりも著しく低かった。この結果は、Saito の予測と一致しており、動詞による対格の付与には隣接条件が働くというSaito の仮説が言語知識として心理的に実在する可能性を示唆している。

このように、本研究の結果は基本的にはSaito の仮説の予測を支持するものであったが、Saito の仮説の予測と一致しない結果も得られた。それは、格助詞「が」、「を」が共に脱落した状態の反応、すなわち、「名詞+名詞+動詞」反応 (例：お母さん スイカ 食べています) が比較的多く観察されたことである。特に、「名詞+名詞+動詞」文に対する格助詞挿入反応では、全体の反応の71.8 % が「名詞+名詞+動詞」反応であった。

三原 (1994) によれば、日本語の格助詞は、(A) 「が」「を」と、(B) それ以外に分けられる。三原によれば、「が」「を」は省略することが可能であるが、それ以外の格助詞は、省略すると、非文法的になるという。つまり、三原によれば、「太郎 お菓子 食べちゃった」は非文ではなく、受容可能な文である。つまり、三原によれば、「が」も「を」も省略可能なのである。今回の結果において、「が」も「を」も共に脱落した形式の文が多数観察されたことは、三原の考え方が正しい可能性を示唆していると思われる。しかし、三原の仮説は、格助詞脱落現象における「が」と「を」の相違を説明できない。本研究において、格助詞「が」と「を」が共に脱落する現象と、「が」と「を」で脱落現象に相違が観察されたことは、主格と対格の付与のされかたには共通点と相違点があることを示唆している。

以上、格助詞脱落・挿入現象について考察した。次に名詞句の脱落・挿入現象について考察する。もし、日本語にVPがあり、日本語が階層言語であるとするれば、目的語と動詞の結び付きの方が、主語と動詞との結び付きよりも強いと考えられる。本研究の結果、「名詞が+動詞」文（例：お母さんが食べています）では、「目的語名詞句の挿入」反応が著しく多かったのに対し、「名詞を+動詞」文（例：スイカを食べています）では、「主格名詞句の挿入」反応が著しく少なかった。この事実は、目的語と動詞の結び付きの方が主語と動詞との結び付き方よりも強いことを示唆しており、さらに、このことは、日本語にVPがあり、日本語が階層言語であることを示唆している。

## 5. まとめ

聴覚障害児の言語の問題の一つとして格助詞の誤用があることは広く知られている。しかし、その背後にある、聴覚障害児の、格付与および動詞句に関わる言語知識が普通児と異なるのかどうか、異なるとすれば、どのような側面が異なるのか、などの点はまだ解明されていない。これらの点を解明するためには、まず、普通児における統語知識の特徴を把握することが必要となる。本研究では、幼児の、格付与の知識および動詞句に関わる統語知識を名詞句および格助詞脱落・挿入現象をてがかりとして実験的に検討した。その結果、格付与については、格助詞「が」の脱落と「を」の脱落との間に相違が認められ、この結果から、主格と目的格の付与には相違点があることが示唆された。しかし、同時に、格助詞「が」と「を」が同時に脱落する反応が明確に観察されたことから、主格と対格の付与のされかたに

は共通点があることも示唆された。一方、主語名詞句の脱落と目的語名詞句の脱落には相違が認められ、目的語と動詞の結び付きが主語と動詞の結び付きよりも強いことが明らかになった。この結果から、日本語の句構造には動詞句VPが存在する可能性が示唆された。

〈謝辞〉本研究に対して貴重なご助言をいただいた東京都立大学、高見健一先生に感謝致します。

## 文 献

- 1) Farmer, A. K. (1984): *Modularity in syntax: A Study of Japanese and English*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 2) Hale, K. (1980): "Remarks on Japanese phrase structure : Comments on the papers on Japanese syntax" Y. Otsu and A. Farmer(eds.), *MIT working papers in linguistics*. Vol. 2. Theoretical issues in Japanese linguistics. 185-206.
- 3) Hale, K. (1983): "Warlpiri and the grammar of non-configurational languages." *Natural languages and linguistic theory* 1, 5-47. Dordrecht: Kluwer Academic Publisher.
- 4) 三原健一 (1994) : 日本語の統語構造 : 生成文法理論とその応用. 東京: 松柏社
- 5) Saito, M. (1983): *Case and government on Japanese*. WCCFL, 2, 1983.
- 6) Saito, M. (1985): *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. MIT ph.D. dissertation.
- 7) 柴谷方良 (1989) : 言語類型論. 柴谷方良・大津由紀雄・津田 葵著 英語学の関連分野 (英語学体系第6巻) 東京: 大修館書店.